

酒々井町の旧石器時代

すみ ふる さわ みなみ いち い せき  
墨古沢南 I 遺跡

～約3万年前の日本最大級の環状集落～

### 遺跡の概要

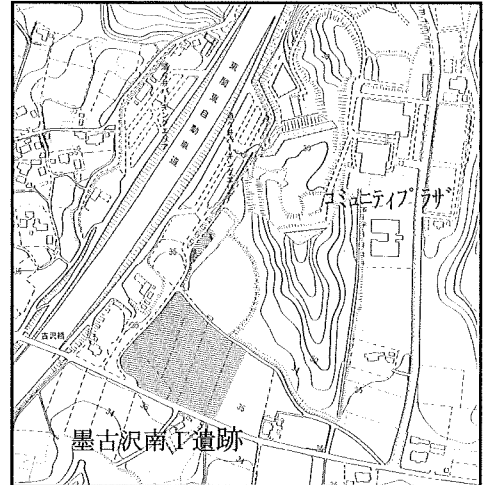
墨古沢南 I 遺跡は高崎川中流の標高約35mの台地上に立地する旧石器時代・縄文時代を中心とする遺跡です。遺跡は酒々井パーキング上り線の拡張工事に伴い発掘調査が実施され、その結果、旧石器時代初頭の約3万年前の石器が関東ローム層の深く（地表から約1.2m下から3,946点出土しました。

出土した石器は49カ所のブロック（石器集中地点）に分かれており、このブロックが扇状に分布している様子などから、これらは当時の環状集落の痕跡である「環状ブロック群」であると考えられます。その規模は推定直径60m×54mにおよび、これは日本最大級の「環状ブロック群」といえ、大変注目される遺跡です。

### 旧石器人達の暮らし

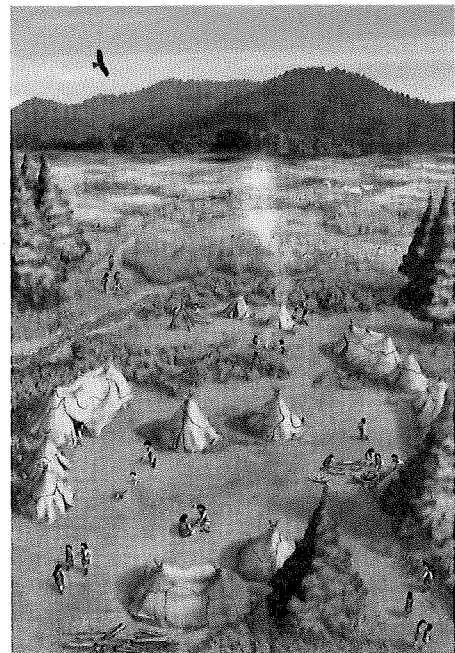
旧石器時代とは今から約3万7千年前から1万6千年前の約2万1千年間をいいます。人々がまだ土器を持たず、主に打ち欠きによって作られた石器（打製石器）や動物の骨や角を用いて作られた骨角器を使い、狩猟や採集活動を行っていました。定住はせずに、テントのような軽易な住居によって糧となる獲物や木の実等を求めてたえず移動を行いながら生活していた時代です。しかも当時は氷河期という寒冷な気候で年間の平均気温も現在より7～8度低く、また火山活動も活発で頻繁に火山灰が降り注ぐ非常に厳しい環境下での暮らしでもありました。

旧石器時代の発掘調査では、深く掘り下げたローム層の中から石器がある一定の範囲に集中して出土しま



調査地点と周辺地形図 (1/5000)

(財)千葉県文化財センター『酒々井町墨古沢南 I 遺跡—旧石器時代編—』2005 より引用



栃木県上林遺跡の環状集落景観想像図

佐野市教育委員会『上林遺跡』2004 より転載

す。数点から時には数千点と規模はさまざまですが、このまとまりを「ブロック(石器集中地点)」と呼び、一単位の家族により残された生活の痕跡と考えられます。そして1つの遺跡からは同時期のブロックが数カ所まとまって検出される例が多く、おそらく当時は数家族がまとまって1つの集団(ユニット)を作り行動していたと考えられます。

### 環状ブロック群とは

旧石器時代の初頭、下総台地を中心にブロックがドーナツ状にめぐる「環状ブロック群」が多く見られています。これらブロック同士は石器の接合関係や石器石材の共有が見られることから、同時にまたお互いに関係を持って存在していたことがわかっており、このことから環状ブロック群は大型獣の狩猟・解体を協力して行うため、一時的に各集団が集まり環状集落を形成したものと考えられます。その中で中央の空間は獲物の解体や調理などの日常作業を行う「共有広場」として機能していたものと考えられます。

このように環状ブロック群は当時の人々の行動やムラの様子を表す資料として重要です。

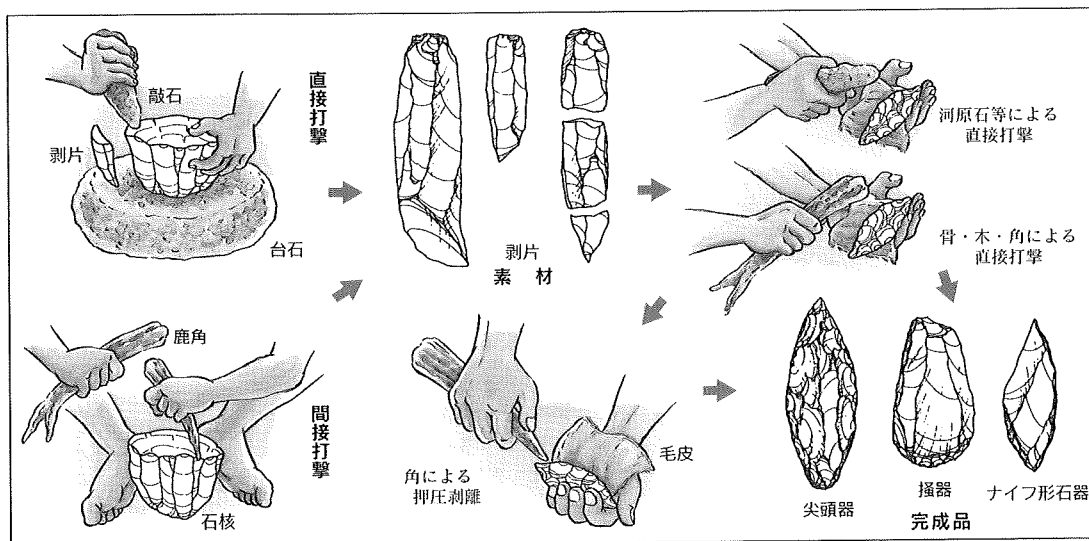
### 石器の製作と種類

旧石器時代では主に打製石器が用いられていました。

石器の製作ではまず第一に石器の素材となる石のかけら(剥片)をうまく、そして効率的に割り取る(剥ぎ取る)ことが重要で、そのため当時の人々はいろいろな素材作出技術を生み出しました。

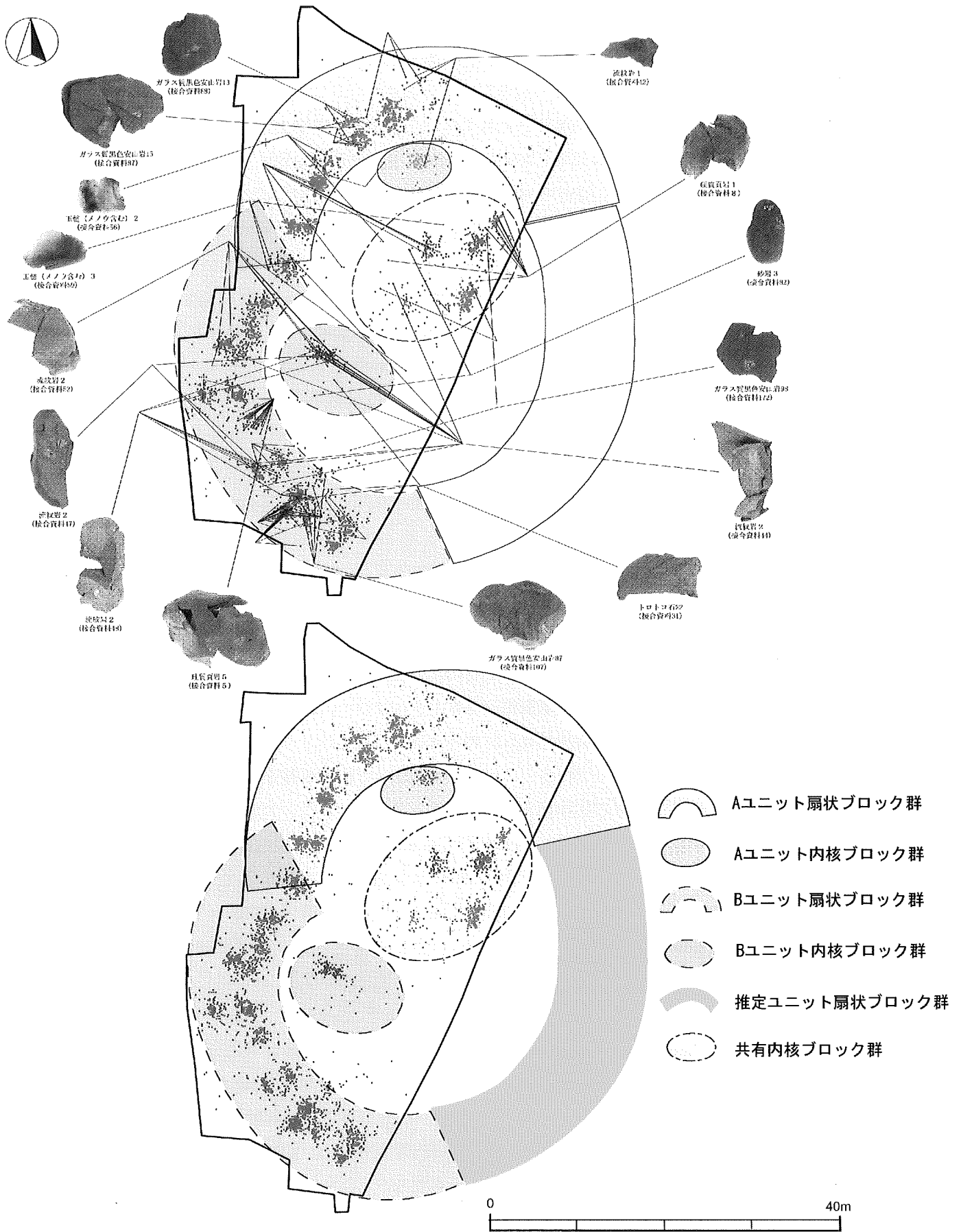
得られた剥片はそのまま刃器として用いられるものもありますが、さらに加工(二次加工)が施されて石器に仕上げられます。当時、用いられた石器には形態や二次加工の方法・部位により様々な種類のものが見られています。

墨古沢南I遺跡で出土したのも、ナイフ形石器、台形様石器、削器、彫刻刀形石器、楔形石器、石錐など多種類にわたっています。



石器の作り方

(財) 印旛郡市文化財センター『印旛の原始・古代—旧石器時代編—』2004より引用



ブロック間接合状況図（上）と環状ブロック群推定モデル（下）

## 遠く旅をしてきた石材

石器に使用する石材は、石なら何でもよいと言うわけではなく、黒曜石、玉髓（メノウ）、チャートなど加工しやすく、割れ口の鋭い石を選択します。

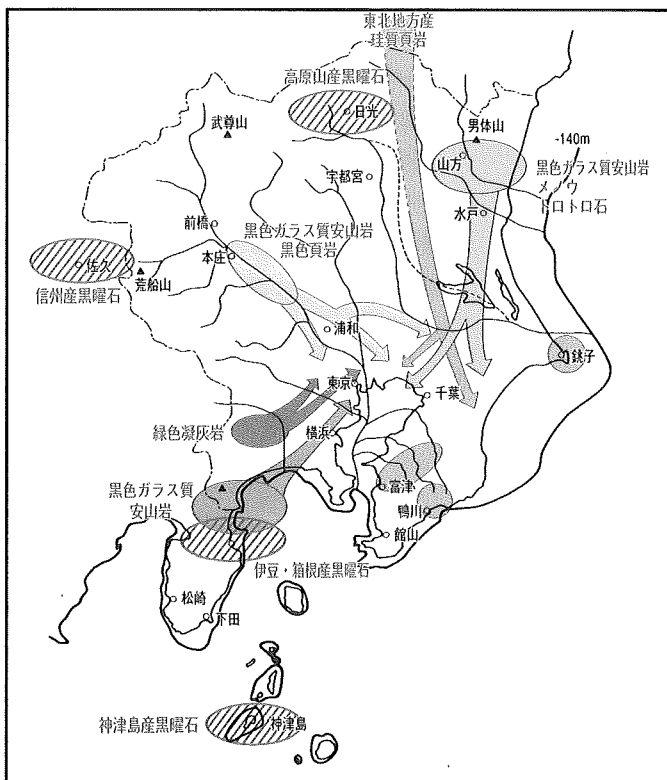
しかし千葉県はかつて「石なし県」と呼ばれたほど、良質な石器石材の原産地がわずかしかなく、黒曜石は伊豆・箱根地方、信州、神津島、栃木県高原山から、玉髓（メノウ）は北茨城地方からなど、交易もしくは各原産地に直接取りに行くなどして入手していたものと考えられ、下総台地だけでも多方面から多種類の石材の搬入が見られています。

墨古沢南 I 遺跡では全体の 7 割以上にガラス質黒色安山岩が用いられていますが、その他にも黒曜石、玉髓、トロトロ石、流紋岩など多種多様なものが見られます。

## 接合資料からわかること

墨古沢南 I 遺跡では同一石材の石器同士が 2 点～数十点とお互にくっついている接合資料が多く見られています。これはひとつの石材（母岩）から石器の素材となる剥片を割り出し、石器製作を行っていった証拠でもあります。

この接合資料を細かく分析することにより石器の製作工程が判明するばかりではなく、素材となった石材の大きさやどこから持ってきたものなのか（川原の転礫を用いたものなのか、崖などの露頭から割り出してきたものなのか）がわかります。また環状ブロック群ではこの接合資料から石材の共有関係（使いまわし）などを調べ、各ブロック間のつながりや関係などを分析してゆきます。



関東地方における石材原産地と移動ルート

(財) 印旛郡市文化財センター『印旛の原始・古代—旧石器時代編—』2004 より引用

## <参考文献> (もっと詳しく知りたい方へ)

酒々井町『酒々井町史 通史編』1987

(財) 千葉県文化財センター『酒々井町墨古沢南 I 遺跡—旧石器時代編—』2005

(財) 千葉県文化財センター『房総考古学ライブラリー1 先石器時代』1984

(財) 印旛郡市文化財センター『印旛の原始・古代—旧石器時代編—』2004

千葉県史料研究財団『千葉県の歴史 資料編 考古1 (旧石器・縄文時代)』2000

千葉県史料研究財団『千葉県の歴史 通史編 原始・古代1』2007